# 童

2020 年 1 月 31 日.

恒例の童を書きながら、窓の外を眺めると春一番のような風が吹き、落ち葉が舞い上がっています。思わず、日付の 1 月 31 日がまちがっているのではと確認してしまいます。ここまで雪が降らないと、このまま春に行ってしまうという諦めと同時に、末恐ろしい自然界の脅威がいつか来るという恐怖も感じてしまいます。

オオイヌノフグリが土手に咲き乱れ、子供たちはふきのとうを見つけてくる毎日。嫁に来て、こんな冬は初めてだと、80 歳を超えた人達があちこちでつぶやいています。これほど、近年にない冬のようです。

そんな中でも、貴重な雪の時には、クロカンやそり遊びを楽しみましたが、夢か幻のようにそんな時があったのかなあと、思い込んでしまう天候が繰り返されています。

クロカンやそり遊び、除雪や雪片付け、これは冬場の大きな運動です。寒くてじっとしていることが比較的多い冬場は、大人も子供も運動不足になりがちの中で、やはり雪のもたらす恩恵は、健康のためにも計り知れないものですね。腰を痛めがちな除雪作業もたっぷり汗をかきますし、しかも早起きをして冬のピリッとした寒気を味わうことができます。クロカンやそり遊びは、起伏のある野山や坂道を何度も上り下りするので、しっかり汗をかきます。アルペンスキーは、スピードとスリルを寒さをこらえながら滑るので、緊張感あふれる疲労はありますが、健康的な汗は不足気味。その点、クロカン、バックカントリー、冬山登山、そして暖冬の特権　テニスなどは、いい汗をかかせてもらいます。除雪で汗をかかない分、どこかでたっぷり汗をかくことが、暖冬の必須科目のような気がします。今年は早くから　自転車も乗れるし、登山もトレッキングもできるし、海岸でたき火もできるしと考え、意図的にたっぷり汗をかくことを心がけて行きましょう。それが、健康に絶対つながると感じています。

# 【親子雪遊び解説】

「黒いカラスも白いカラスになる」戦時中、悪い意味で使われた言葉（洗脳されてしまう）だと思いますが、「落ち葉も土も雪になる」これが親子雪遊びのキーワード。と言っても、まず青ちゃんに最初に洗脳されるのは 大人であり、次に子ども。大人が楽しみを先導（導く、誘導、示す）することが大切です。「雪がないのにどうするの？」ではなく「雪がなくても面白い」という意識先行です。

**①スロープの親子そり滑り**

遠くの雪山を見ながら、親に思い切り引っ張ってもらうそり滑り。これでまず子ども達はそりの世界に入ります

**②夫婦そり滑り**

そり滑りを客観的に子ども達は見ます。大好きな両親が楽しむ姿、歓声、必死になって登る姿、熱い一日のスタート、今日一日楽しくなりそうだという期待感が高まり、雪の存在を忘れてしまいます。

**③裏山のそり滑り**

ここで、ある程度明暗が見えてきます。面白そうだと、そりで滑っていく子ども。**こんな所でどうやって滑るのだろうと当惑する大人**　もちろん戸惑っている親の子どもは滑りませんし、遊べません。子どもそっちのけで遊ぶ大人は、近年非常に少なくなってしまっている（多分、子どもの頃の体験不足や育った環境の悪化など）のが現状であり、やんちゃな大人の誘導、先導が、自然界の暮らしでは盛り上がります 。恐る恐るやってみて、初めてこんな所でも滑るんだと実感された人が多かったのではないでしょうか。 同時に、予想以上にスピードが出て、樹木にぶつかってしまう危険を感じてもらう（大人）ことにより、我が子は子どもだけで大丈夫か、大人同伴かなどを、判断してもらうことが大切です。それが、次のステージに生かされるのでした。

**④大地畑への東側急斜面**

ここは、事前に注意したとおり、小学生（大地出身者）は大丈夫、大地年長児は、両親が見極めてその責任において滑ってください、年中以下は大人同伴という事前説明のもとで開始した、危険と裏腹の常識では考えられない魅力的な斜面です。スピードの危険よりも、樹木にぶつかるリスク、子どもの技術で避けれないリスクです。これは、大人が滑ってみれば判断できます。我が子がどこまでできるかどうか 。だから、自然の遊び暮らしなどどんな時でも、まず大人先行、大人体験が子どもの安全　見極めのうえでも必須事項です。

大人が先行しない限りは、子ども達はついてきません。（勝手にやる　やらせるのは無謀　暴走　大人責任放棄））安心と信頼が伴わないからです。その意味で、子どもそっちのけで大人が楽しんで夢中になる（子どもはまず客観的に見て、模倣し、安心し、信頼し、共に共有する過程を歩む）ことは、とてもいいことだと大地では考えます。

「面白そうだからやってみたら」（大人はやらないで子どもに声をかけている）状況においては、きっと、子ども達は「じゃあ、どんなに面白いのかやって見せて」 と内心思っていることでしょう。

年少児などは、あの急斜面は怖さ優先で、この年齢にはふさわしくない環境であり、やらないのが当たり前ですが、大きい子ども達の姿を脳裏に焼き込んでいることが、大切なのです。潜在エネルギーとして生きるのです

**⑤田んぼ、土手、藪、雑木林斜面登りバックカントリー**

そり片手にあらゆる場所を歩き、滑っていく散歩。最終的には天神様を目指すのですが。常識では考えられない場所を歩いて行きます。普段の散歩でもトレッキングでも登山でもクロカンでも、えっと思う場所でも、青ちゃん達大人が当然の顔で進めば、子ども達はついてきます。まさに、黒い場所も白い場所になるのです。だから、そり片手に田んぼの畦を滑り、泥に入り、道なき道を登っていっても、子ども達はついてきます。

ところが、見ていると、大人先導家族がとても少ないのが現状です。見守る傾向が強く、子どもを先に行かせ、後から 大人が見守るのか、応援するのか、それとも雑談しながら子どもを行かせているのか。父親が俺の後をついてこい、大丈夫だから、という姿はほとんどありません。（青ちゃんの後をついて行けば大丈夫か）という安心感があるとすれば、こちらがやり過ぎもしくは大切な役割を奪っている環境設定にあり反省すべきことかもしれません。どちらにしても、子どもには、導く先導する大人が、人生の羅針盤となる大人が、必要です。

**⑥天神さん遊び**

子ども達は、普段からあの石段や斜面、そして川遊びが大好きです。ここでどんな遊びをするか。こちらも大人誘導次第です。石段そり滑りは、一歩間違えば石に手足頭をぶつけます。だから、やらせる子どもを密かに指名選別します。大地 OB は、小さい頃からその運動神経性格を知っているので、この子なら大丈夫だという子どもだけ、更に年長児も同様で、その子のレベルに応じて石段を組みます。誰でもやりたい子どもにやらせるのではなく、大人が判断してその子のパフォーマンスを十分に発揮させるようにしています。

**⑦七福神**

大地になくてはならない七福神。見事なパーフォーマンスでした。舞台で見るような七福神で、一方通行で刹那的に退場するのは実に惜しいと思い、更に子ども達に身近に感じてほしい（誰が何神様か、一度の言葉の自己紹介だけではわからない　大人でも・・）ので、花いちもんめで、七福神を指名して遊ぼうと考えました。

**⑧食事の後のスロープでの遊び**

まるで雪がある時と変わらないように、土手をそりで何度も滑っている子ども達。朝の光景とは全く違います。雪がなくても、子ども達は遊べるんだと単純に感じられたのではないでしょうか。それは、やはり、大人の精神的先行がキーワードです。まず、大人が楽しみ体験することが先決です。大人は、以前は子どもだったのですから。

※岩波少年文庫「4 人の姉妹　上」p183 ページ　　まさに我が意を得たり！！　別名若草物語　絶賛夢中読書中